

— 第39編 — シャンゼリゼ^{*1}の緑

フランス革命勃発後の1793年、国王ルイ16世の王妃マリー・アントワネット^{*2}はコンコルド広場^{*3}でギロチンの露と消えた。そこからルーブル宮やチュイルリー公園を背にして、あなたの凱旋門に向かうシャンゼリゼ大通り^{*1}（写真39-1）。その地点に立つと、広場の



写真39-1 凱旋門に向かうシャンゼリゼ大通り

広さに驚き、はるかに続く緩やかな登り勾配の粉れもない「大通り」の巨大さに圧倒される。そして、その両側に配される大統領官邸のエリゼ宮やプティパレ、グランパレ^{*4}といった重要な施設群が、分厚い街路樹群の陰に見え隠れする。その一つの歴史を辿るだけでとても時間が足りないパリの街。ナポレオン3世の時代に都市再生家オスマンが作りあげた、紛れもなく都市景観の至宝である。

血なまぐさい歴史はたいがいどの都市にもある。しかし私たちが今日にするパリの美しさ、華やかさの背後で流された血や涙の量は尋常ではない。

そんなことに思いを馳せながら、この大通りを端から端まで歩いてみることをぜひお勧めする。幅広の歩道や、公園のような並木道が大通りの両側に配され、立ち並ぶ建物群や連なる店舗、興業施設の装飾を愛でるだけでも、たっぷり半日は過ぎてゆく。足が棒になったら歩道に溢れるカフェに席を探し、渴いた喉を癒そう。

コンコルド広場からほどないエリゼ宮^{*5}の近くにきてベンチに腰掛けると、その椅子座の視点から別世界が展開する（写真39-2）。通りに平行に配された幾重もの街路樹や大小の広場・空地が、大通りの枝打ちされた空間を直角に貫く視線を段階的に引き受ける。その奥行きと光のコントラストにこの都市空間の豊かさと快さの理由を見い出し、そして暮らす人々の誇りの訳を感じる。素早く流れる車列、軽やかに走り去る自転車、さっそうと通り過ぎるパリジェンヌ、ゆっくりと歩を進める老夫婦、もちろん子供や犬達も加わって、ここはあたかも市井のコンコースだ。さまざまな人生の時間と 생각이交錯するプラットフォームだ。木陰のベンチを独り占めしていると、様々な音も聞こえてくる。自動車の大通りの石畳を転がるタイヤ、警笛、通りすがりの男女の話し声、木々のざわめき、子供たちのママを呼ぶ声。整然と配された巨大な街路樹とランダムな大小の高低木群がフランス風の幾何学を描き、都市の喧噪を和らげる。それだけでいい、お節介なBGMはいらない、余計な過剰を排する都市のエスプリと作法は、こうしてわたしたちの心に染み入るのである。



写真39-2 エリゼ宮を望むシャンゼリゼの緑

*1
Avenue des
Champs-Élysées

*2
Marie Antoinette
(1755~1793)

*3
Place de la
Concorde

*4
Petit Palais,
Grand Palais

*5
Palais de l'Élysées
(1718):フランス
大統領官邸